

《第二十六章・有（輪廻）の十二支分を考察する。》

第二項 [縁起を了解する・しないことからの、輪廻への入出の仕方] に二項目がある。[章の著述を説く]、[意味を要約して章の名を示す] である。

第一項 [章の著述を説く]

『依拠し関係して起こる（縁起生である）もの、それは空性であると説かれる。』<sup>1</sup>

というその縁起とは何であるか。」あるいは、

『縁起生を見るものが、苦と、』<sup>2</sup>

と、縁起生を見るならば四諦の真如を見ると説かれたその縁起とは何か」といえば、これを示すにあたり二項目がある。[順行の縁起]、[逆行の縁起] である。

第一項 [順行の縁起] に二項目がある。[放つものの因果]、[成すものの因果] である。

第一項 [放つものの因果]

無明とは、真如を知ることを単に否定しただけや、それより単に他であるだけではない。しかし、その知覚に反する不合致の方向である、プトガラ<sup>3</sup>か法（現象）を対象として自らの性相として成立したと捉えるものである。

それによって、正しい意味を覆い隠したプトガラが、再転生を顕現して組み立てる行である福德業と、福德でない業と、不動の業か、身体と言葉と心意の三様相の諸業を顕現して集め成し、生じさせる。それは再生—来世の蘊が起こる為に働き、そのプトガラがそれを得る為に意図して行うかは確かではないけれど、その業はその果の為に介入する。そのように生じさせられたそれらの業の力によって、（輪廻の）衆生へ行くことになる。

それから輪廻の種子となる、行の縁を持つ、行を積んだそのプトガラの識が、天等の行に見合った諸衆生に入る—生まれることになり、それも死有が滅したならば、たった一瞬で天秤棒の左右が上下する様子で、生有の諸蘊は業が放った如くに生じる。

それ故に、そのように母の子宮に識が入ってから成長していったならば、その縁を持つ四つの名の蘊<sup>4</sup>と色蘊となる。名とは、残りの四蘊であるが、それを「名」と

1 『依拠し…説く。』: 『根本中論』第 24 章 18 偈。

2 『縁起生…苦と、』: 『根本中論』第 24 章 40 偈。

3 プトガラ: 心身の集積に名付けられた「者」。[序論] 脚注 50 参照。

4 四つの名の蘊: 受蘊（感受作用の集積）、想蘊（識別作用の集積）、行蘊（他の四以外の行い等の集積）、識蘊（心王〈第一章脚注 26 参照〉の集積。六識ある。）。

呼ぶのは、業と煩惱によって染み付けられたことによって、それやその生所へと導くから。あるいは、諸々の意味（目的）へ向かって想の力によって動くので、「名」である。「色」とは、ここでは頰部曇<sup>5</sup>等である。

そのように、四つの名と頰部曇等の色形が出来上がったならば、苦しみが起こる生門となったので、處であり、眼と耳と鼻と舌と身体と意の六處が名色の縁より起こるとなる。身体と意の根（感覚器官）はその前より有るけれど、六つの集合が、ここから起こったことに従って説かれた。

それから、六處に依拠して触が正しく起こるとなる。『その触が如何様に生じるか。本質は何か。』と思えば、増上縁<sup>6</sup>である眼と、所縁縁<sup>7</sup>である色形と、等無間縁<sup>8</sup>である「念じるもの」一作意に依拠して眼識が起こるのみである。そのように、「念じるもの」が象徴する等無間縁が、受等の四蘊の名と、先の二つの縁である形有るものに依拠して眼識が生じることになる、眼と色形と識の三つが集まったことが、触の定義であるが、生じ方も識の如くである。境（対象）と根（感覚器官）と識（知覚）の三つが集まった眼に関する集一触によって、他の五つの触についても知りたまえ。それも、三つが集まった時に好ましい・好ましくない・中間の三つの対象に決定する。

それから、その触より、好ましい・好ましくないとの決定に合わせて、楽・苦・平等の三つの受（感受作用）が全く起こることになるが、眼に関する集一触の縁による受（感受作用）で、残りの五つの受についても知りたまえ。

そのようであれば、放たれたものは名色と、六處と、触と、受の四であると『阿毘達磨執論』より説かれ、結果の時の識もである。何が放ったのかは、無明に依拠した行が（放ったの）である。どのように放ったのかは、因時の意識に、業の薰習が染み付けられる方法によってである。「放った」の意味は、愛等の成すものが有れば、それらの果を成すに適すとしたことである。

## 第二項 [成すものの因果]

それから、受の縁によって愛が生じるとなり、愛とは受である対象を持つものである。何故愛すかといえは、その愛を持つ者は、受（感受）を目的として愛するとなる一顕現した欲望を生じさせる。それも、楽である受に対しては離れない為に、

色蘊（形のある身体の集積）を加えて五蘊になる。

<sup>5</sup> 頰部曇：胎児が子宮の中で成長する際の状態の一つ。

<sup>6</sup> 増上縁：特定の知覚の特性を生じさせる力のある条件的原因。[第 1 章] 脚注 309 参照。

<sup>7</sup> 所縁縁：現前識（現前にあるものごとを概念作用なく直接知覚する知覚作用）が生じる条件となる認識対象。[第 1 章] 脚注 307 参照。

<sup>8</sup> 等無間縁：知覚が、ただ明らかであり、知るものとして生じる主要な質的原因。  
[第 1 章] 脚注 308 参照。

苦に対しては離れる為、平等に対しては衰えぬ為に愛する。

そのように愛するとなれば、愛の縁を持つ、業を放つ因である「欲」と「見解」と「持戒と禁戒」と「我を語る」という四様相の取<sup>9</sup>を、その愛を具えた者が近く取ることになる。その四取が有れば、その四つを近く取る者—その生じさせる者の取という縁によって、有がよく起こる—生じるとなる。しかし、もしある近取者が真如を了解する妙観察<sup>10</sup>の智慧の力によって、受に対する愛を「我がもの」としておらず、二元性の無い智慧<sup>11</sup>を実現したことより取が無くなったならば、彼は解放されるとなり、その時再転生が有るとはならない。

取の縁によって起こるその有も、五蘊の本性であると知るべきであり、身体と言葉と意の善・不善（等）三業も、未来の五蘊の有（輪廻）が起こることによって、因に果の名前が付けられて「有」という。そこで、身体と言葉の業は色蘊であるが、意の業は四蘊の本性である。それについて、他論書より毘婆沙部が身体と言葉の業を有形であると主張することを否定して、身体と言葉の行為に入る時の思を（業であると）説かれてはいるけれども、月称は有形であると承認された。意の業とは勿論、「思」であるけれども、思と相応する他の諸々の心・心所はそれと同一本質であるので、意業は四蘊の本性であると説かれた。

愛と取が求めたことによって、来世が成立する実現力を持った業の有から、来世の蘊の生を得ることが起こるが、蘊が熟す老と、蘊が壊れる死と、死につつある完全に蒙昧な貪欲と共にある心の苦しみである悲痛と、その悲痛によって引き起こされた言葉による慟哭と、五根を傷つける苦と、意の知覚を傷つける心不楽と、苦と心不楽より起こった身体と心の諸々の混乱—それらは生よりよく起こるのである。先に斯くも説かれたさまでそのように—自らの因と縁のみの力によって、苦しみである蘊と集合と群—苦は集積された。

楽が混ざっていない苦しみの我性である、我と我所（我がもの）の本性と離れていながら幼子が名付けただけのものによって、「このただそれだけのものが起こることになる。」と、輪廻へ順次入ることを説かれた。

そこで、何が成立するかといえば、生と老死である。何によって成立するかは、愛の縁を持つ取によってである。どのように成立するかは、行が識に染み付けたその業の薰習<sup>12</sup>が実現力を持つようにした、「業の有」にした方法によってである。

これによって、無明と行が放ったまさしくそれを成立させるので、「放つもの」と「成立させるもの」の因果は、一回分の生を得る因果であるが、（輪廻での）それぞれの生（での十二縁起の起こり方）にそって示したのではない。

<sup>9</sup> 取：近く取る（チベット語直訳）。

<sup>10</sup> 妙観察：「それぞれを悟る」の意味。それぞれを明らかに知ること。

<sup>11</sup> 不二の智慧：空性を直覚する瞑想状態の意識。

<sup>12</sup> 薰習：業が心相続に染み付けた、潜在的な可能性。

しかしながらそれぞれに（分類して）示したのは、「放たれた苦」と「成立した苦」の違いと、「放つもの」と「成立させるもの」という因の異なる違いを示す為である。（何故ならば）『本地分』より

「識等から受まで<sup>13</sup>と、生と老死が混合した性相であるならば、何故二様相として示されたかといえ、苦である事物の性相が別であると示す為と、『放つ』と『顕かに成立する』という分類を完全に示す為である。」

と説かれた如くである。

## 第二項 [逆行の縁起]

無明等から輪廻の諸支分が起こるので、輪廻に識が受胎する等の根本—主要な因は行であり、それ故に、縁起の真如を直接に見る賢者達は放つものである業を行わない故に、真如を直接に見ていない不賢の者は、行の行為者である。（何故ならば）経部より、

「比丘達よ。無明に関係する者、このプトガラは、福德が顕現せられることも顕かに行う。福德でないものが顕現せられることも顕かに行う。不動が顕現せられることも顕現して行う。」

と説かれた故である。

そのように、不賢の者は行為者であるので、無明を具えた者のみが行の行為者となるが、無明を捨て去った真如を見る賢者は、行為者ではない。（何故ならば）真如を直接に見る故である。

そのように、無明が有れば行は起こるけれど、無ければ起こらぬ故に、無明が滅した—捨て去ったとなれば諸行も起こるとはならない。（何故ならば）因が揃っていない故である。

「その無明は何によって滅すとなろうか。」といえ。

無明が滅した—尽きたとなるのは、縁起の真如を誤り無く知ることによって、真如の意味を修したことに依拠して真如を直接に見るとなるが、まさしくそれを見る瑜伽行者が無明を確実に捨て去る。

無明を捨て去ったことによって行が滅すとなるが、その如く行等のそれやそれらの前の支分が滅したことによって、それやその後の支分は顕現して起こらない。これらの次第は、我と我所自体の性相として成立したことが欠如する、楽と混合していないことによって「ただそれだけ」である瑜伽行者の苦の蘊は、再度起こらぬので、そのように正しく滅す—尽きるとなる。

他の全章において、諸法（現象）が本性として成立したことを正理によって否定して、本章で否定していないのは、プトガラと法（現象）の縁起において本性として成立した本性を否定したところに、これら一切の支分も本性が無いと既に説かれ

<sup>13</sup> 識等から受まで：結果時の識、名色、處、触、受。

た（故である）。ここでは、そのように決定した真如を修したならば無明は退くが、その力によって有（輪廻）の残りの一切の支分も無くなって解脱を得ることと、それに似た見解を見出さなければ無明は退かないので、その力によってもろもろの後の支分に入り込むので、輪廻の輪を廻すと説くのである。

第二項 [意味を要約して章の名を示す]

プトガラと法（現象）の縁起を対象として、我であると捉える二つの無明が二我を如何様に捉えたかという俱生の無明<sup>14</sup>の捉え方を確認して、ある限りの正理を説かれた一切は、その二つが斯様に捉えた二我を否定して、その対治<sup>15</sup>である二無我を了解する見解を生じさせる支分であるを知って、尽く清浄な無我を了解する見解を究明して、聞思修の三つによって、逆行の縁起の方向へできるだけ変化するように努めたまえ。

「有（輪廻）の十二支分を考察する」という十二偈の我性、第二十六章の解説である。

DECHEN 訳

<sup>14</sup> 俱生の無明：学説等によって理由付けされることに依拠せず、自然に備わっている無明。

<sup>15</sup> 対治：対処。